

# カトリック 仙台教区報

2014年11月2日 No.220  
 発行  
 カトリック仙台司教区  
 〒980-0014  
 仙台市青葉区本町1-2-12  
 Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378  
 発行責任 広報委員会  
 URL <http://sendai.catholic.jp/>

## 仙台教区教会委員長の集い 地区制における福音宣教に実りを！

台風19号が東北に接近しつつある10月12日(日)13日(月)仙台教区センターに教区内の小教区教会委員長(信徒会長・代表)45名、修道会代表8名、司祭7名が、「地区制における福音宣教」について話し合った。

この集いは仙台教区宣教司牧評議会例会主催で、今回は2010年6月以来4年ぶりの2回目。地区制になつてからは初めての開催となつた。

開催に先立って平賀司教司式の主日ミサが大聖堂で行なわれた。司教は説教の中で「地区制による宣教司牧を実りあるものにするためには、信徒・司祭・修道者が互いに交流を深め協力し合つていくことがますます必要になつていく」と述べた。

その後の「仙台教区の現状」についての講話でも司教はそのことを強調された。続いて教区からの連絡として、教区本部事務局の小守林新策氏(本部への送金について)滞日外国人支援センターのギャリール師(支援の現状報告)、仙台教区サポートセンターの小松史朗師(被災者支援活動の現状と課題)によって連絡・報告がなされた。

12日の日程を終えて、参加者のうち40数人が仙台市の郊外にある作並温泉に向かい、浴衣姿で懇親会に臨んだ。会食で隣り合せになつた者、同室になつた者、風呂で顔をあわせ

た者同士が気兼ねなく様々な話を取り交わす光景がみられた。13日朝に元寺小路教会に再集合。朝の祈りに続いて、グループ・ディスカッションに入った。



第1の話し合いは「地区制の問題点 地区制に望むこと、地区制の実り」という共通テーマで話し合った。第2の話し合いは5つのテーマについて、7グループの自由討議であった。

①地区制の宣教司牧とこれまでの宣教司牧との違い

②地区制の中での信徒の役割と司祭の役割

③震災以降の教会の役割

④教会と社会の繋がりに関する話し合い

### 第1・2地区の祈り

地区制になつたのを機に神父のできること、信徒のできることを理解するチャンスと受け止め、地区内小教区の交流を深めその輪を隣の地区にも広げていけますように。

震災や原発事故の悲惨さを自分の問題として受け止め、忘れずにこれからも自分たちのできることを探していくことができますように。また、被災地の方々の労苦を忘れずに外国人の方々への支えになれるように私たちが強めてください。

### 第3地区の祈り

神よ、私たちに聖霊のお力をお与えください！新しい制度の中で、司祭・修道者、信徒の一致・協力が密にできますように。教会同士のつながり、交流を円滑にできますように！高齢者、次世代を担う青少年、私たちの身近にいる外国出身の信徒が多く集い絆をより深めていくことができますように導き、お守りください！

## 生命の泉

「イスラム国」の残虐な処刑の様子が世界中を駆け巡ったが、国内にも最近悲しい事件が続いている。10月5日佐世保の同級生殺害の15歳少女の父親が自殺した。犯人が15歳で犯行の狼藉さから世界に衝撃を与えた。「日本で起きた犯罪の中でも最も陰惨なものの一つだ」(イギリス、デイリー・メール紙)▼インターネットの時代には一億総評論家となつて当事者とその周辺を建前論か正義論で攻めまくる。標的になつた人はたつた一人が決着をつけざるを得ない。現代人は家族がいても一人ぼっちだ▼少女の父親は死んで親としての責任を果たさそうとしたのか、あるいはどう決着をつけたらよいか分かんなくなつて死を選んだのか▼父親の友人は「なんで、お前逃けたんか」という気持ちも強い。僕は本当は彼には一生償い続けて生きていくべきだと思つていたまた、ある人は「この親までが自分の命を絶つてしまったら何にもならないというか、なんか空しいですよ」のように周辺には自殺で決着をつけたことにならない、という意見も多い。私たちは憎むべき犯行の責任を追及する(たとえそれが死を選ぶことになつても)。その一方で逃げないことが責任の取り方だと考える気持ちも捨てきれない。毎つた命に責任など取りようもないが▼「宗教は人を救えるか」という本が出た。誰でも、この本から連想するのは死後の命は保障してもらえないか、ということであろう。しかし、宗教は死を主たる仕事とするものであるか▼「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」とのみことばがある。自分を好きになれず未来にどんな希望も持てないなら「死んでいる者たちだ」と主は言われる。ドイツの19世紀の政治家ビスマルクいわく「来世への望みなしには、この世で朝起きて服を着る意味すら失せてしまふ」



### 被災地支援と教区「地区制」そして『信仰の喜び』

司教 平賀徹夫

東日本大震災という未曾有の大被害がありました。大地震と津波による被害からの復興は未だ成らず、原発事故による大災害は、復旧はおろか収束の見通しさえない状態ながら、風化という語が世間を覆い始めたかのごとくです。被災された方々の苦悩はますます深刻になっています。わたしたちは何ができるのでしょうか。

仙台教区は、2011年の大災害への支援活動の柱に「仙台教区サポートセンターを中心とする支援活動」と「教区4→6、45計画」を立てて進めて来ました。これは今も第三期として続いています。この活動の意味を簡単に表せば、「教会は教会の内々だけのことをしてはられない」と身をもって知った活動、と言えるのではないかと思います。今までとすれば強かった「うちの教会」の枠を越えて近隣あるいは被災地の教会と力を合わせ、信者であるなしに関係なく被災された方々に寄り添ってあげられるとすればうれしいことだ、と知る体験です。

大災害のさなか、わたしたちは2011年7月から翌年の7月までを「教区年」として過ごしました。「ローソクリレー」で大ローソクを教区の全小教区と修道院、教会の事業所・施設を巡回させたし、「スタンプラリー」では多くの教会へ巡礼し、また、ミサ中の共同祈願で順番に教区内全教会を思いながら互いに祈りました。各県の県大会への参加も心がけました。その教区年の標語は「わたしたちは主において一つ」でした。お忘れではないでしょう。わたしたちは主において一つなのです。

そして今、教区は地区制を採りました。これの成否はまず各地区内で、①司祭同士の、②司祭と信徒・修道者間での、③全小教区の信徒間での、話し合い・一致・協力をいつも目指す姿勢を保ち続けることにかかっています。

フランスコ教皇様は『福音の喜び(33)』で、「皆さんぜひ、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すというこの課題に対して、大胆かつ創造的であってください」と呼びかけておられます。

(10月12日(日)、教区“教会委員長の集い”での司教講話レジュメから)

フランシスコ教皇様は『福音の喜び(33)』で、「皆さんぜひ、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すというこの課題に対して、大胆かつ創造的であってください」と呼びかけておられます。

#### 第4地区の祈り

父なる神様にお祈りいたします。近隣教会との交流を深め、お互いの状況を理解し、ともに歩んでいくことができますようお導きください。

#### 第5地区の祈り

父よ、地区制に移行し、地区内小教区の交流が必要になっております。司祭と信徒、司祭同士、信徒同士が話し合い、交流することにより、子供・若者の育成、震災を経験して私たちの知った地域との交流をさらに深めることができますように。

#### 第6地区の祈り

第6地区は仙台市内の4教会、宮城県南

部の4教会、そして福島県最北の原町教会で構成されています。今年から始められた新しい地区制の中でそれぞれ教会の活動にとりこんでいますが、解決すべき問題が山積されており、今までの殻をなかなか崩すことができません、一致することの道のりの遠さを感じています。お互いが、理解し合

#### 第7地区の祈り

い、お互いを大切にしながら、お互いの違い、距離を乗り越え、豊かな交流、一致と協力を実現していくことができるよう、導き、力づけてください。

#### 第8地区の祈り

司教様のお話にあるように、内向き志向を改め、社会で救いを必要としている人々と関わりを持てますように。地区制になったことを生かして、教会同士の交流、ボランティア活動等の意識が広がりますように。信徒の役割が、冠婚葬祭、外国人信徒との交わり、聖体奉仕者の育成等積極的に協力できますように。神父様方が地区長を中心に連絡調整を行い、共通意識のもとに、信徒をリードしていきますように！



### 司教日程

11月・12月

- 11・1 ① カトリック医療施設協会
- 2 ② 立正佼成会仙台教会
- 発足55周年記念式典

- 5 ③ 暁星園祝別式
- 6 ④ 社会司教委員会

- 7 ⑤ 8 東北地区万ト校教育研修会 (郡山)

- 10 ⑥ 13 日韓司教交流会
- 15 ⑦ スペルマン病院・追悼ミサ
- 16 ⑧ いわき砂子田祭

- 18 ⑨ 定例会、教区司祭団・役員
- 19 ⑩ 暁星園公式祝別式

- 21 ⑪ エキムニズム教令50周年記念
- 23 ⑫ 24 部落差別人権委・秋季台信
- 28 ⑬ 仙台教区サポート会議(釜石)

- 30 ⑭ 第3地区堅信(四ツ家)

- 12 ⑮ 1 月 仙台教区・司祭の集い

- 2 ⑯ 人権を考える委員会
- 3 ⑰ 部落差別人権委・定例委

- 7 ⑱ 大船渡教会60周年
- 9 ⑲ 司祭評・役員会 司祭団・役員

- 10 ⑳ 子どもと女性の権利擁護アスク
- 16 ㉑ 18 司教のための社会問題研修会
- 20 ㉒ 宣教師牧評・役員会

- 25 ㉓ 降誕祭

慈しみ深い主よ、あなたのお導きによって多くの意見が出され、私たちが抱えている思いが具現されました。この上は、主よ、あなたの計らいによってより一層強い流れとなりますように。



# アジアン・ユース・デイに参加して 元寺小路教会 中村祐登

今年の夏に開催されたAsian Youth Dayにホセ神父様とともに参加してきました。これは、8月10日〜17日の一週間にわたって韓国で行われたものです。大会テーマ「Asian Youth / Wake Up / The Glory of the Martyrs Shines on You (アジアの若者よ！目覚めよ！殉教者の栄光があなたの上に輝く！)」のもとに、アジアの22の国から約2千人が参加しました。

## 教皇様とランキも!!

プログラムは前半と後半に分かれており、前半3日間は韓国の各教区に分かれてホームステイをするプレ大会、後半は全参加者2千人が一堂に集まっつての本大会でした。

### プレ大会

私はソウル大司教区で過ごしました。ここでの主なプログラムは分かち合いと巡礼でした。分かち合いでは自分の信仰の原点につい



て分かち合い、国や家の様々な境遇を懸命に乗り越えていく青年の姿を間近で感じました。巡礼はソウル市内中心部に設けられた8カ所のチェックポイントを回るもので、各チェックポイントでは殉教者の牢屋の体験、水鉄砲を正面から受けることによる水責めの迫害の体験、手を縛られてのチェックポイント間の移動、街中でカトリック信者の市民を見つけて一緒に写真撮影、殉教地での十字架へのメッセージ(この十字架は韓国の各教区から集められ、最終日の教皇ミサの祭壇となった)など、楽しみながらも殉教者や韓国の教会について思い起こせる素敵なプログラムでした。ソウル教区最後の夜のミサは、ミヨンドンのカテドラルでささげられ、開始前の夕食会とともにとても素晴らしいソウルでの最後の夜となりました。

### 本大会

テジョン教区で本大会は始まりました。ここでのプログラムはプレ大会と同じような分かち合いと

殉教地を静かに歩く巡礼に加え、各国の文化発表会、フランシスコ教皇様との集い、現在のアジアの諸問題や信仰生活における課題を話し合うワークショップなどでした。

### 教皇様との昼食会

私は、ワークショップと並行して行われた教皇様との昼食会に参



© COPYRIGHT L'OSSERVATORE ROMANO

その中で私は被災地から来た立場として「日本の仙台教区に来て、ぜひミサをささげて被災者の皆様を励ましていただきたい」というお願いをしました。その言葉に教皇様は笑顔で応えてくださり、その後の報道で「来日に強い意欲」というのを見て、頑張つて英語で話した甲斐はあったように思います。

夢のようなその時間、全然実感が湧きませんでした。したが、帰りのバスの中で急にそれが湧いて来て泣きそうになったのを覚えています。本当に幸せな体験でした。

教皇様が大会期間中を通して一番強調されていた言葉は、今回の大会テーマでもある「Wake up!」という言葉。お食事の時も「その意味をきちんと考えなさい」と話され、期間中の説教では「それをしていないと喜ぶことも歌うこともできない。目覚めるということとは世の中の圧迫や誘惑の感覚を弱くすることだ」と説明されました。

### 主の祈り

大会期間中の全てのミサでの主の祈りは、皆で手をつないで歌われました。この皆で一つになる体験はとても感動的で、信仰は政治的、あるいは国家間にある難しい

問題を乗り越えられることを可能にさせるのではないかと感じました。この体験は、もともとアジアの青年たちと交流をしたいと思わせてくれました。

### 分かち合い

最終日の日本人巡礼団での分かち合いでは、「もつと青年の活動が活発になるべき」、「今回出会った人たちのようにもつと自分たちの信仰について考えなければならぬ」、「教会に来る若者が減っていても日本の教会に対する悲観的な感情は持つてはいけぬ」などといった言葉があり、アジアの他の青年たちと自分たちとの間に少し差を感じながらも、この経験を生かしてもつと日本の教会を青年によって活性化していくという前向きな意見がたくさん寄せられました。これをうけて、



日本に帰国してから各教区に散らばりながらも「AYD参加者が中心になつてつながつていこう」という動きがあります。

**前に進め!**

今回のAYDを通して感じ・考えたことは、「止まっている暇はない、くよくよせずに前に進め!」ということ。大会テーマにもある「目覚めよ」という言葉をうけ下を向いている暇はないと感じ、そう考えると自分が抱えている悩みやわだかまりもちっけなものに感じられました。また、自分たちの国の境遇がどんなものであれ、それを素直に受け入れて信仰に忠実に生きる様は、教皇様の「若者は教会の未来だけではなく現在でもある」という言葉とともに、改めて自分の信仰生活について考えさせてくれました。

最後に、この大会に関わってくださったすべての皆さまと神様、そして



て行かせていただいたことに感謝して、この経験を生かしながら信仰生活を歩んで行きたいと思えます。

**AYDに参加して**

**ゴンザレス・ホセ神父**

AYD(Asian Youth Day=アジア青年の日)はアジアの青年たちが一つの国に集まって、フレンドリーな雰囲気の中で祈り、信仰の経験を分かち合いながら四日間を過ごします。

今年韓国で開催されましたが、次回2017年の開催国はインドネシアに決まりました。

以前わたしはWYD(世界青年の日)に2回参加させてもらいましたが、AYDは初めての経験でした。

それぞれの集まりは素晴らしい出来事がたくさんあると思います。今回のAYDは、参加した日本の青年のためにとっても役に立つ集まりでした。

WYDは全世界から青年が集まり、教皇様と共にいろいろな活動が行われますが、宿舎やカテケージス(信仰の勉強会と分かち合い)など、青年の動きはほとんど国ごとに動きます。

しかしAYDでは、色々な国の人でグループを組み、そのグループのなかで集いを過ごします。そしてWYDでは国ごとに動く

のでほとんど日本語で過ごせませんが、AYDではある程度英語が出来るなければ他の青年たちとの信仰の経験を分かち合えませんか。

AYDは色々な国の青年たちと交流できることで、特に日本人の青年たちのためによりよい信仰を分かち合える素晴らしい場でした。

もちろんWYDは、全世界から30万人(バチカン1985年)から357万人(ブラジル2013年)が参加する大きなイベントで、教会の大きさがよく味わえる機会です。ダイナミックな喜びの集いです。200カ国以上の青年が一つの目的で集まります。神さまの救いのみ業(イエス・キリストの受難・死・復活)を大人数で味わうことです。

AYDはもっと小さな規模で行われます。今回AYDでは24カ国から2千人ぐらいの青年が集まり、信仰の経験、特に信仰のあかしを分かち合う機会でした。WYDと違って信仰の経験を分かち合うためにみんな一生懸命英語を使っていました。私もそうでした。

AYDはWYDより少人数なので、他の国の青年と話し合い、かかわり合い、色々な活動ができました。そして、青年たちは自分の信仰の経験を幅広く、もっとゆつくり互いに聞き合うことが出来ました。

**わたしたちは小さな宣教師 仙塩地区教会学校祈りの集い**

仙台教区のみなさん、いつも青年のために祈ってくださって心から感謝します。これからも、仙台教区の青年たちが信仰をあかしする道を歩むことが出来ますようにお祈りをお願いしたいと思います。青年のみなさん、2017年インドネシアのAYDにぜひ参加しましょう。

恒例になった年3回の「仙塩地区教会学校祈りの集い」が10月13日一本杉教会にて行われました。

これで仙塩地区にある教会を子どもたちは全部回ったことになりました。今日は3連休最終日で子どもたちは遊びたい気持ちがあったにもかかわらず、この祈りの集い、神様の方を選んでくれたのです。参加者は大人と子ども合わせて35名でした。感謝でいっぱいです。

今回のテーマは「私たちは小さな宣教師」です。五大大陸宣教ロザリオ一環の祈りを通し、身体は教会の中にありながら私たちの祈りは大きな翼をつけて世界中を巡り、連帯し、多くの方々を訪問しました。

一本杉教会聖堂で子どもたちが祈りに合わせて、一人ひとり色別の大連の花を一つ持ち、主の祈りと10回

のアベマリアを唱えながら、同時に紐に花を一つずつつけて5連まで繰り返し、一環のロザリオを作り修道院の庭にあるルルドの洞窟まで運びマリア様におさげしました。写真!!

みんなで心一つにしお祈りする喜び、一致、真剣さを感じ本当に素晴らしい時を共有し一緒に過ごすことができました。

**\* 五大大陸宣教ロザリオ \***

1連ごとに色分けして五つの大陸を表したロザリオ。(緑)アフリカ (赤)アメリカ (白)ヨーロッパ (青)オセアニア (黄)アジア 今回は一連毎(大陸別)に意向をたてました。

例えばアフリカ大陸のため!! エボラ出血熱で苦しんでいる人々の救いと癒し。等々。(聖ウルスラ修道会 遠藤トシ子)



# 2014年「カトリック青森県の集い」 テーマ「キリスト者の生き方」

今年の「青森県の集い」は9月21日(日)青森明の星学園の明の星ホールで開催され280人が参加した。

主催者を代表して青森県カトリック連絡協議会 会長 前田 博氏が「私たち仙台教区に今年の4月1日から地区制が導入され、長年皆様とつながっていた当協議会の集いも今回をもって最後になり、第1地区、第2地区の活動へと移行することになりました。皆さまのこれまでのご協力とご理解に感謝いたしまし」と、あいさつした。



2014年カトリック青森県の集い

れる語り口で参加者の笑いを誘った。その中で「『あなたの信仰があなたを救った』といったイエスのことばの凄さ」と『わたしは時どきブレます、でもあなたの子どもです』の中に信仰に生きている証しを説明され、お

ういう気持ちを持つていければ、おん父に繋がっているといえるのではないでしようか」と話された。

午後には聖歌練習があり、そのあと平賀司教主司式、6人の司祭による共同司式ミサがあり、終了解散となった。(本町教会 久世満正)

## 北上教会創立50周年

### 新しい「キリスト像」を購入

記念行事 10月25日(土)を2週

つづいて、基調講演には第4地区の司祭佐藤守也師が「キリスト者としての生き方」をテーマに話された。写真は、ユ



モアあふ

間後に控えて、今その準備が最終段階を迎えて大あわての最中です。それは、予定参加人数が大幅に上回り80人(司祭10人)とうれしい悲鳴を上げている状態です。道のは決して平坦ではありませんでした。おりしもちょうど、4月に仙台教区の地区制が導入されたこ

とで、兄弟姉妹関係にあった水沢教会と北上教会間が線引きになったことや、第3地区はまだ未知であったこと等々ただでさえ…とネガティブになってしまいがちでしたが、ポジティブへと方向を変え、記念誌も作りました。

第3地区と第4地区をどんどん巻き込み、特に高橋神父様、ニコラウス神父様、ミゲル神父様には何かと大変ご迷惑をおかけしたかと思えます。本当によく相談に乗っていただき、おかげで楽しく進めることができましたこと感謝いたします。

後半2カ月を切ったころ香部屋から大きな白木の十字架を見つけたことで、キリストの「ご像」をこの際新しくしようという気運が高まりました。十分な話し合いが持たれなかつたこと、期日に間に合うかなど心配していましたが、意外に早くイタリヤから航空便で届いた「ご像」を拝見したときは張りつめていた心が一変してしまいました。



た。早速業者に頼んで十字架に取り付け、祝別していただきませした。北上教会が仙台

教区最後の50周年と聞いております。この祝日を無事に過ごしたいとの願いを込めて、手前味噌になりますが苦勞が実り、聖堂が一段と光りを放っているかのように感じます。

どうぞ、機会がありましたら一度北上教会を訪れてください。歓迎いたします。

北上教会  
教会委員長 佐藤 彥子(いっこ)

## シスター渡辺和子記念講演会 「置かれたところで咲く」

今年会津若松市にある学校法人「ザベリオ学園」は創立80周年を迎えています。

10月2日に会津風雅堂で中学・高校生80名、保護者、一般市民、学園関係者の方々計約1300名がシスター渡辺和子(ノートルダム清心学園理事長の話に聞き入りました。「どんな世の中でも努力と我慢を忘れず不自由を恐れてはいけない」「置かれたところを居場所とし花を咲かせなければいけない、つらいことがあっても逃げず、根を伸ばし、広がるのが次に美しい花を咲かせるので



とがあっても逃げず、根を伸ばし、広がるのが次に美しい花を咲かせるので

す」と話されました。

ザベリオ学園はカナダのモントリオールから若い修道女が80年前に会津に派遣され、学園を開校しました。

会津にまかれたカトリック精神は「天使愛児園」の開園から芽を出し、しっかりと根をおろし、小学校、中学校、高等学校と成長を遂げました。

80年前の厳しい環境の中で会津の土地の人の好意と、支援を受けて努力されてきたことは修道女達の生涯をかけた生き様にあると思います。

学園の歴史を読みますと「私も無原罪聖母宣教会の創立者デリア・テトロは宣教会を未知の国に向けて送るにあたり、もし私たちが神様の事業を築きたいと望むならばその土台の中に自らを埋め、自分自身を忘れましょう。」と書かれています。

多くの苦難を乗り越えて、この会津でシスター渡辺和子の「置かれたところで咲く」を見事に実現されたのです。

2011年東日本大震災の3月末に修道会は学園から去りました。新しい理事会の運営の元に新生「ザベリオ学園」がスタートし、2011年中学の共学が再開、高校も2012共学になり生徒数は倍増しました。地域の期待にこたえる私学としてこれからも会津で咲き続ける学園を目指します。

# 日本カトリック正義と平和全国集会2014福岡大会

## 「いのちを大切に作る社会をめざして」 ～見て、聞いて、知って、働く～

9月13日～15日、福岡教区カテドラル大名町教会をメイン会場とし全国大会が開催された。社会司教委員会を構成する平賀司教、大塚司教、松浦司教、菊地司教を含め950名を超える集まりとなった。

初日は韓国チエジュ教区長カン・ウイル司教による基調講演。テーマ「東アジアの平和と福音的展望」―韓国国民1%の済州島民と東アジアの平和実現を夢見て―である。

最初に、記憶に新しいセウオル号沈没事件、先日のフランシスコ教皇訪韓の際のエピソードを話された。つづいて、現



も海軍基地問題などで揺れ

動くチエジュ島の問題について触れられた。後半は過去の日本の植民地支配、4・3事件など歴史の中で大きな苦しみを負わされた島民の人々について語った。これについては日本人に向けての語りかけでもある。今の日本が競争をする国へ進もうとしている

事への警告ともとれる。過去の過ちと未来を見据え、地上に平和を築くために何が出来るか考えさせられた。「正義と平和」の根幹が問われている今、市民レベルの草の根でつながり、国境・民族を越えて互いに連帯し協力し合う事の必要性について痛感した。

講演後に引き続き、高校生平和大使のアピールがあった。彼らは、「核兵器の廃絶と平和な世界の

実現」を呼びかけ、高校生1万人署名活動に取り組んでいる。同じ思いを持つ若い世代と共に活動することで平和への思いをさらに広める事ができるのではと感

じた。「いのち・平和」への思いを教区の皆様に共感してもらうために、さらなる努力をしていかなければと思う。

2日目はカテドラルでの主日のミサで始まり10の分科会、6



か所の現地学習を終えたあと、4つのネットワークミーティング

が行われた。夜までのハードなスケジュールとなった。私は「玄海原発に異議あり―それでもあなたは原発を選びますか―」の現地学習に参加。

この問いかけにどう答えるか決めるのは私たち。これまで通り何もなかったかのように生きて行くことは出来ない。これから

も、福島原発事故の被災者の抱える困難に耳を傾け寄り添う心を持ち、小さな力ではあるが、大切ないのちを守るため平和活動を続けたいとの思いを新たにしたい。

最終日は、「いのちを大切に作る社会とは」のテーマで、長年ホームレス支援を行って

司教のシンポジウムが行われた。フランシスコ教皇の使徒的勧告『福音の喜び』をベースに話が進められた。奥田牧師は「自分の苦しみに悲しみはすでにイエス様がその十字架を背負ってくださった。だから私たちは自分以外の人の苦しみを少しは背負うことが出来るはず。勇気を出して教会から外へと出向いていきましよう。」と呼びかけられた。「いのちを大切に作る社会」を目指し、小さくされている人のもとへ一歩踏み出す勇気をいただいた。

シンポジウム終了後に、宮原司

## 神は愛なり(2)

滝田 十和男

戦争は終わったもののB29の空襲で、壊滅的な損害を受けた青森市にありながら、建物の損壊だけは免れたわが保養園では、電気、水道がストップしたままで、食料や医薬品の配給もままならず、600名もの患者は悲惨な生活に追い込まれていた。殊にいちばん重症の患者が収容されている病棟の看護作業に就いていた私の両の手指に麻痺が進んで、働く事が出来なくな

教司式による派遣のミサが行われた。福岡大会のテーマのもとに3日間を共にした参加者を前に、「ゆるし合い、おぎない合うことが平和へとつながる。平和の一步は私たちから。」と話された。お説教を聞く参加者の心が一つになったのではと感じるミサとなった。メインテーマをそれぞれが深めた有意義な3日間となった。あらためて心からのおもてなしをしてくださった福岡教区の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

会長 木元 範子(北仙台教会)

れていて、麻痺に侵されたわが手を見るにつけ、私もやがてあの人たちのような立場に、置かれる事は目に見えており、人生に全く絶望していた私は、両足が義足でその上両手も、ほとんどの指を失いながら、底抜けに明るく振る舞う大橋さんに、不思議なものを見るように感じてはいた。窓際の小さな本立てに、大橋さんの聖書や公教要理などの本があり、読み物に飢えていた時でもあり、私はそれを読むことよって、初めて信仰に目覚めてゆくのである。大橋さんからは一言も入信を勧められた訳でもないのに、何時の間にか彼に従って、月に一度だけおい出になる小野神父のお話しを、聴きに行くようになり、遂に、終戦の前日に隔離病棟で、お会いしたあの小野神父から、イグナチオの霊名を頂いて、洗礼のお恵みに浴することになって、私は新しい人生に踏み出したのであった。

(松丘教会信徒会長 89歳)

# 仙台教区「新しい創造」…第3期の取り組み

## 共に歩み 共に生きる

### 松木町教会愛の支援グループ

#### 「ふれあい茶の湯をベースとして」

東日本大震災からもう3年半も経ってしまったという思い。松木町教会では、3年前、避難所の8月閉鎖に伴い9月から東京教会管区、カトリック東京ボランティアセンターの援助を頂きながら仮設住宅への支援活動を継続している。現在も松木町教会から30分程のところにある宮代仮設へ伺っている。そこには、原発事故のためふる里を追われ避難生活を強いられている浪江町民が住んでいる。私たちは、避難所の時からの「ふれあい茶の湯」をベースにしなが、さらに、宮代仮設の方々の良い思い出づくりとして、年中行事なども取り入れてきた。集会所に集まって来られるのは女性が多いが、「楽しい昼食会」の時には、ビールも少々あることから男性も顔を出すようになった。思えば、はじめて宮代仮設へ伺うことになったころにはまだ自治会がな



浪江町請戸

なかった。それは、当時の状況から浪江町役場の指示により居住世帯数(当時49世帯)だけに配ることとはできなかった。しかも、その頃(避難所でも)松木町教会の名で支援活動することを躊躇していた。チラシには、カリタスジャパン・ふれあい茶の湯ボランティアと書いた。宮代仮設にとっては初めての支援団体。配られたチラシを壁に貼って指折り数えて待って

いたという。さて、仮設住民の方々の初対面の日を迎えた。集会所に集った住民同士も初対面。笑顔など全くあるはずもない。それから3年の間に自治会も設立され、月2回のイベントも数を重ねるとに「カリタスさん」と呼んで頂けるようになり、カトリック教会ということも分かって頂けた。クリスマス会には、松木町教会学校の子どもたちが聖劇を演じてくれる。震災の年のクリスマス会とさらに正月会を企画した時、「私たちは、クリスマスも正月もないと思っただんだよ、やってくれるの」と、嬉しさが伝わってきた。

### 「共に歩み」

イベントを企画する時、自治会役員を中心にCTVC(カトリック東京ボランティアセンター)と私たちと話し合う。そこには、いつも共に歩むことを忘れない。福島市民の私たちも、遠くへ避難を強いられていたとしたならば、「その時」「今」「これから」を共に考えて歩いて欲しいことを胸に…。集会所に伺う度、心痛むことがある。原発事故による苦悩の中、先が見えず、仮設住宅生活が長過ぎて、体調が悪化している方が目立ってきている。その様な中で、ふる里には帰れないが、転出される方もいる。「皆さんをあとにして申し訳ない」という気持ちからなのだろうか静かに行かれるという。

### 「それでも笑顔に」



松木町教会「愛の支援グループ」

ふる里に帰りたい！帰れない！そんな悔しき、辛さの中に、今では宮代仮設の方々(高齢者、独居者が多く、子供が一人も住んでいない)にも、笑顔が多くなっている。今年7月誕生会(年中行事の中に誕生会も繰り入れていた)の時のことだった。86歳になつたおばあちゃんへのハッピーバースデイ合唱の後、そのおばあちゃん皆さんの前で「避難所を何カ所も回され、何度も死にたくなつたことがあります。でも、今は、こんなに楽しくしてもらって死にたくありません。ありがとうございます。」と、明るい声で話された。会場からは大きな拍手。

「心の復興を！」と寄り添い続けてきたカリタスのボランティアさん方の目頭が熱くなった。CTVCのお陰で、東京、さらに全国の皆さんが笑顔を届けてくださっている。その笑顔に元気づけられ、ひとときだけでも笑顔でいられる

ことは、今日の元気、明日の元気につながっていると思う。福島市民の私たちも元気になれている。感謝してもしきれない気持ちがある。この9月には3回目の「敬老者を祝う会」を行った。帰るときの一人的おばあちゃんの小さくなったうしろ姿：「写真」。私たちは、これからも笑顔をお届けしようと思っている。

笑顔で「共に生きる」ことを願いつつ。感謝

松木町教会「愛の支援グループ」  
代表 鈴木キミ子



# 講演会「原発に依存しない経済の可能性」

講師 浜 矩子(はまのりこ)さん(同志社大学大学院教授)

この講演は8月25日、仙台教区司教研修の一環として郡山教会で行われ、一般にも公開されました。(講演要旨)

浜さんは、開口一番、与えられた演題では原発問題についての視点が甘い。演題を「原発に依存する経済の不可能性」とすべきだと述べた。

原発というあれほど危険性が高く、人間に制御できないものにエネルギー供給の3割以上を依存する経済のあり方が可能であるはずがない。原発の存在を前提として経済活動を考えたことに、大きな問題があった。それが福島の問題が発生してより明確になった。

われわれは、原発撲滅というスローガンを掲げて進んで行くべきだと強調した。



が目前に示されている。

原子力の平和利用という響きのよい言葉は、まやかしであって、結果として今日のような原発立国日本ができあがってしまったことに大なる脅威を感じる。原発に依存して経済をまわすということは一切考えないことを目指していくべきだ」と、原発再稼働を目指さうとしている現政権のスタンスを批判した。

『アベノミクス』について、今の政権が目指しているのは「富国強兵」だ。しかも「強兵」のために憲法を改正し、「富国」のために原発を再稼働しようとしている。さらには、武器輸出三原則をなし崩しにしていく。

さらに、「脱原発では日本経済は成長しない」という意見に対して、「現在原発が稼働ゼロでも経済はまわっている。壊滅的になったわけではない。そもそも、経済活動とは人間による人間のための活動であり、人間が人間を踏みについたりするはずがない。だが、経済効率が追求されるほど人間が踏みにじられる。次第次第に経済は人間を排除する。多少とも人間を不幸にする面を持っている活動を、経済活動と呼んではならない。同様に、従業員の人権を踏みにするような組織は、企業と呼んではいけない。

経済学の創始者アダム・スミスは『国富論』で、経済活動をおこなう人々が共通に持っているなければならない特質として、「共感性」(人の痛みがわかる)をあげている。

まともな経済活動には、目指すべき2つの柱がある。

柱1は、「シェア(share)」である。シェアには、「市場占有率」という意味があるが、「分かち合い」の意味もある。「奪い合いのシェア」から「分かち合いのシェア」へ発想を転換することだ。

柱2は、包摂性(包括性)と多様性である。

今の日本の経済社会は包摂度が低下してきている。貧困の淵をさまよう人々の割合が高まっている。「富国強兵」に役に立たないものは全部切り捨てていくという包摂度の低い状態へ、そして多様な考え方の共存を許さない方向に向かっている。

包摂性と多様性が実現されているのは、まさにこの聖堂の中だといえる。世界中のキリスト教的共同体がその場所になっている。ぜひとも皆さんと共にこの社会がとんでもない方向へ行ってしまうないよう力を合わせたい。

「日本国憲法は、基本的にこの包摂性と多様性が出会うという設計になっている。私たちはこの日本国憲法を一言たりとも変えることを許してはいけない」と主張した。

講師 浜 矩子さんは、一橋大学経済学部卒業。三菱総合研究所入社。2000年から98年まで、英国駐在員事務所長兼駐在エコノミストとしてロンドン勤務。帰国後、三菱総合研究所経済調査部長、同社政策・経済研究センター主席研究員を務め、経済動向に関するコメントライターとして内外メディアに執筆や出演を行っている。2002年秋より同志社大学大学院ビジネス研究科教授に就任。

## カンボジア・ステンミエンチャイ地区での活動報告⑥

元寺小路教会 小野 武

「大きい子供の家」(6歳〜12歳位) このクラスは、小学校に入学寸前の子どもたち約25名が小学校の授業に付いて行けるように学んでいます。先生は、わからない子どもを大切に、ていねいに教えています。

「絵本が読めるようになります」クメール語の単語の読み方と先生が発音した単語を書きとる勉強をします。時間は、かかりませんが繰り返すことにより簡単な絵本を読めるようになりま

す。王子と王女、トラ、ワニ、大蛇等が出てくる物語が大好きです。

### 「ソロバン教室をはじめました」

私が一番驚いたのは、算数の時間を、3桁の足し算と引き算を勉強していま



す。算数は、日本と同じに得手不得手の子もがいます。いち早く解く子、時間いっぱいかかっても回答が出せない子がいます。手足の指を使っても計算しきれなくて困っている子もいます。引き算で10を借りれば良いのに、30とか40をそのまま計算しようとするので、なんとかしたいと思いつけているうちに、日本のソロバンを思い浮かべました。日本で私を支援していただいている方から、タッピングよく支援の承諾をいただきました。でも、先生用の大きなソロバンを探すのに一苦労されたそうです。幸い塾をやっていた方から贈呈していただき、30名分のソロバンを用意することができました。カンボジアでの初めてのソロバン教室かもしれません。はじめ、子どもたちは、玩具と勘違いして、机や床にソロバンを走らせました。ソロバン特有の指使いや「ご破算ねがいますは」などのことばがクメール語でどう表現したら良いか悩みましたが、ジェスチャを入れながら教えることができました。手や足を使わずに楽しみながら、算数が好きになつてもらえばと願っています。

# 各地から

## インターナショナルミサ

9月28日は「第100回 世界難民移住移動者の日」、これにちなんで元寺小路教会では37カ国、約100人の外国籍信徒の方々を迎えてインターナショナルミサが行われた。同教会の今年度の重点目標の柱の一つが「外国籍信徒の積極



的参加を可能とする教会づくり」でもある。

日本カトリック難民移住移動者委員会の委員長松浦悟郎司教のメッセージも式次第に7カ国語で表示され、共同祈願は5カ国、「子どもたちの祈り」は6カ国の人々がそれぞれの母国語で祈りをささげた。

圧巻は30名の子どもたちがお祈りの民族衣装で祭壇に上がり、司祭と手を携えて「主の祈り」を唄い、写真、「主の平和」を祈り、会

衆席に下りて行き会衆と握手を交わしたことであった。会衆も、将来の教会を担う幼い手をいとおしむのが印象的だった。

しかし、目を外に向けると、厳しい現実が渦巻いている。司式のエメ神父も説教の中で、「人類の歴史上初の世界規模の戦乱『第一次世界大戦』が1914年に勃発してから100年。100回の「世界難民移住移動者の日」を重ねても、世界から戦乱・紛争による犠牲者はいつこうに無くならないし、命を脅かしかねない貧困や疫病に苦しむ人々が後を絶たない。今こそ世界の人々が民族を超え、国境を超えて平和を祈り、戦争をなくし、貧困を克服するためにお互いに手をとりあつて、理解し合い、協力し合つて頑張らなければならない。そこにこそインターナショナルミサの本当の意義がある」と平和の尊さを説いた。

### あけの星会巡礼

#### 一本杉教会と山形東根の

#### 「聖母マリア観音」を訪ねて

9月27日(土)、秋晴れの朝、集合は元寺小路教会。バス3台に97名が分乗し、昨年12月に落成したばかりの一本杉教会で、ラ・トゥール神父司式のミサから巡礼がスタートした。

山形道を経由、紅花資料館の土民家での昼食は、芋煮汁、茄子の漬物、



枝豆にリンゴとお弁当に手鼓。資料館では紅花で染め上げた色鮮やかな着物の美しさに驚かされた。息子が元寺小路教会で巡礼の案内を見たことから、古川教会の佐々木奎(けい)さん高橋ひろみさんと私の3人で参加した。そして期待の龍泉寺の「聖母マリア観音」に到着。隠れキリシタンから預かったというお寺さんの、ご丁寧な案内と説明をお聞きした。何代にも継承し、長い間大切に保存し、お守りくださったことに感激し涙した。

わたしことですが、幼いころより聖母マリア観音に特別な気持ちがあり、最高に幸せな一日となつた。今回の巡礼に勇気を持つて参加させていただいたことに神



### 「生命の神秘」

過日、知人より 20年近く前にスーパーで景品としてもらった10cm位の小さいコーヒーの木にかわいい白い花がいっぱい咲いたとの知らせを受けた。時々水をかけたり肥料をあげたりしていたが、いつの間にか、すっかり忘れていたとのこと。彼女の喜びは、天にも昇るほどであった。

この話を聞き私はすぐ「大賀はす」のことを思い出した。1951年に大賀一郎博士が遺跡発掘の際、1000年前のハスの実を発掘したのである。3粒のハスの実を植え、大切に育てたところ翌年の春、美しいピンクの花が咲いたのであった。当時「世界最古の花」「生命の復活」などと大きなニュースになったことを覚えている。

生物にはその中に秘められた生命の神秘がある。最近人為的に生命を操作する動きが見られるが、創造主の計らいと生命の神秘の前に敬虔さと慎重さが求められるのではないだろうか。地球を大事にする会 Sr. 小川敦子

様に感謝!!(古川教会 荷花しげ子)

### チャリティコンサート

10月5日、「東日本大震災復興支援。ハイオルガン・チャリティコンサート」が元寺小路教会大聖堂で行われた。あいにくの台風接近の悪天候にもかかわらず100名を超す方々が来場、ドイツのオルガニスト、ハンス・ペーター・レッツマン氏による素晴らしい演奏が披露された。

コンサートの冒頭、レッツマン氏より「オルガンの響きのうちに私たちの心が一つとなり、今後の復興支援への力となれますように願っています」との挨拶をいただいた。

当教会のオルガンは19ストップ(音色)ですが、まるで40〜50のストップがあるかのような自由自在の音使いによる演奏は素晴らしく、会衆を魅了した。

プログラムの最後には「花は咲



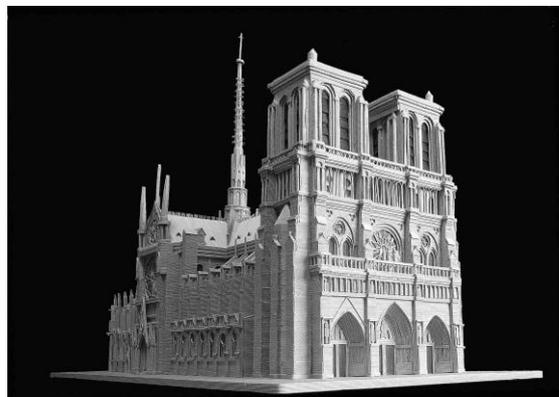
く」のテーマによる即興演奏で、会場はスタンディング・オベーション、感動の嵐となった。

なお、会場での募金と収益金13万3千円は、カリタスジャパンを通して東日本大震災被災地復興支援募金に寄付された。(渡辺恵子)

# ノートル・ダム大聖堂 模型製作 山浦 玄嗣

去年12月19〜20日にフランス国立東洋言語文化研究所で「現代日本における独自性の礼賛」というシンポジウムがありました。

画一的文化だとヨーロッパ人が誤解している日本文化の多様性を紹介しようという試みで20人ほどのシンポジストがいくつかのセッションに分かれて話をするというものでした。わたしはその講師として招待され、ケセン語訳聖書の話を中心に津波のことなども交えて講演してきました。フランス語はできませんので、通訳がつかまりました。ヨハネ福音書1章の冒頭のケセン語訳を朗読しましたら、聴衆が非常に喜び、講演後に何人かの学者たちがわたしのところに来て言いました。「初めに言葉があった……の〈言葉〉Logosを〈思〉



pensee」と訳したのはけだし名詞である。我々フランス人にとってフランス語の聖書はかなり訳のわからないところが多くて困惑する。フランス人のキリスト教離れの原因の一つでもある。今度はケセン語訳聖書をフランス語に訳してもらえないか。キリスト教理解の根幹にかかわる仕事だ」と言われました。わたしはフランス語を書くことなどできませんが、実にありがたいことでした。

フランスに4日いましたので、その間にパリを少し見物しました。ノートル・ダム大聖堂の美しさに魅了され、帰国してから設計図をたよりに、苦心惨憺して模型を製作しました。半年かかってやっと数日前に完成しました。縮尺1/167。建物の幅30cm、長さ80cm。尖塔の高さが68cmです。材料は荷造り用の紙バンド。

## 新聖堂落成1周年 一本杉教会秋祭り

10月5日(日)、12時〜15時、近隣の方々を招いて秋祭りを開催した。

一本杉教会と聖ウルスラ修道院は、昨年12月にすべて完成して落成式を行ったが、聖堂は10月から使用していた。

落成式のミサの中で平賀徹夫司教は、「この聖堂は、この地域に派遣されたもの、地域社会に奉仕する教会であってほしい」と話された。地域の方々からも「新し

い教会を見てみたい」との声も聞こえてきた。

これを受けてぜひ近隣の方々に教会に足を運んでいただくとうと「教会秋祭り」を計画した。

チラシとポスターを作成して地域に配布。焼きそばやおにぎり、玉こんにゃく、缶ビール



や缶ジュースを用意、ミニバザーや子どもコーナー、お楽しみ抽選会などを準備した。町内会にお願いして大きなテント2張りもお借りした。八木山教会からお借りした色とりどりのフラッグも祭りの雰囲気を出した。プログラムでは大震災以後訪問活動をしていた「荒井東通仮設住宅」にお住いの方々と、大正琴を練習しているグループ(12人)による大正琴の見事な演奏、町内の方による手品、7月の宮城県大会で民族舞踊を披露して下さったフィリピンのご婦人た



### 新刊案内

サンタ・マリアの御像はどこ？  
プチジャン司教の生涯  
著者 谷 真介／発行 女子パウロ会  
／定価 1,000円＋税

ちにお願ひして踊っていただき参加者を魅了した。さらに、隣の聖ウルスラ学院英智の中高校生90人編成の吹奏楽部「写真」が「北島三郎メドレー」「沢田研二メドレー」「ピンクレディ・メドレー」などを演奏し、迫力ある演奏に聴衆は大拍手。

聖堂や修道院を見学した方々は、「すばらしい建物ですね」と感嘆の声。

台風の接近で曇り空だったが、終了直前にパラパラと降った程度で、延べ400人近くの方々が参加、楽しい時間を過ごしていた。

計報  
スール・マリア・リドヴィナ  
堀江 茂子



聖ウルスラ修道会  
2009年7月11日 生れ  
2009年12月7日 受洗

1990年4月10日 入会  
1994年8月30日 初誓願  
1997年8月30日 終生誓願  
2014年9月5日 帰天(89歳)

若い頃から様々な病気と闘いながら修道生活を送る。様々な使徒職に取り組み、多くの生徒や父母、先生方を信仰に導いた。彼女の気さくで明るい人柄は、そのまま福音宣教だった。

250年のキリシタン迫害と、宣教師も司祭も不在の中で、信仰を守り続けた長崎の浦上の信者たちが、長崎の外国人居留地に建築を許されて完成した大浦天主堂にやってくる。プチジャン神父に「サンタ・マリアの御像はどこ？」と聞いた一言によって、日本における信徒発見が明らかになりました。

来年の3月17日は、その信徒発見から150年に当たり、本書はそれを記念して出版されたものです。

1865年の信徒発見以来、教会史の中に必ずその名前が上がる。パリ外国宣教会の司祭プチジャン神父とは、どのような生涯を送った人であるかは、出来事の大さき故か、あまり知られていません。

ベルナル・ダディ・プチジャンは、1829年6月1日、フランス東部のブランジエ町で生まれました。10歳で、神学校に尊敬するプロ神父に出会い、その影響を受け、宣教師を目指すようになります。

1853年、司祭叙階。1859年、パリ外国宣教会に入会。1860年、東アジアへの「緊急出発命令」を受ける。その後、大浦天主堂建設責任者として、長崎に赴任。1864年、大浦天主堂献堂式。その翌年、信徒発見の出来事がありました。

1866年、司教に叙階され、同時に日本駐在教皇代理の任務も引き受けました。長崎に戻った司教の働きは、以前と変わらず、役人の目を避けて、夜訪れてくる信者たちの世話や、村に出かけて、信者たちの集まりに出かけることなどで、休む暇もないほどでした。その中で「浦上四番崩れ」と言われる出来事がおこりました。さらに出津でも、他の地域でも同様の迫害は続いています。

日本の信者のために、プチジャン司教はヨーロッパを巡り、日本の現状を訴え、祈りと資金援助を求め旅を続けました。この文庫版の小さな本の中に、単にプチジャン司教の生涯だけでなく、彼が、どれほど日本のため、また信者のために尽くしたかがぎっしり詰まっています。